

研究意欲

根 山 芳 晴*

7月30日、その日は早朝から抜けるように晴れあがった夏空、瀬戸内特有のヘイズがかかって、いかにも一般流の弱さを物語る典型的な海陸風の出現日であった。

その日1日、広島湾南部の小島上で、気象台屋上のコンクリートの上で、そして市北部の白島小学校3階屋上の焼けつくような校庭で、日の出とともに始められた海陸風特別観測は、若い気象技術者のエネルギーによってみごとやりとげられた。観測そのものの成果は別にして、若い人々の気象学に対する意欲的な取組み姿勢のあらわれにいまさらながら意を強くした。学問的追究に対して求められる研究は、大学や研究所の学会員には至極あたりまえのことと受けとられているが、多くの地方会員の大勢を占める気象庁職員には、行政面では業務化されておらず、気象学会という立場でみる限りある種のむじゅんを感じている若い地方会員は相当数にのぼっていることは疑い余地もない。そのような雰囲気の中でより良い計画、指導とアドバイスを与えさえすれば、若い会員の力がみごとに反応してその結集が現われるのを体験し、研究意欲の増進を如何に計かり、そして如何に気象学の発展を次代に引き継ぐべきかを痛切に感じた。研究とか研修は他の人から命令されてやるのではなく、自分から積極的にやってこそ意味があり、それがまた研究調査の本来の姿だと反論する人が必ずいるものだが、そういう議論のための議論をしているような人々ももう少し視野を広げて反省してもらいたいものである。

定容積気球が十数 km 南の西能美島で放球され、約1時間たってふわふわ浮揚して気象台の上空約600 mにやってきたときに、思わずトランシーバーでかわした各観測地点の「おめでとう」と言った声は、単なる感傷ではなく、本当に心から観測成功の喜びを表わしたものであった。そのことは何を意味するか、日本で始めておこなわれた海陸風研究での定容積気球追跡観測を、しかも、海風の吹走経路を予想しての試みを、どうしても成功さ

せたいという、技術者としての信念と意気ごみの現れにほかならない。観測後ひきあげてきた能美島組、白島組、そして気象台組が回顧した唯一のことは、“もし成功しなかったら何度でも、そして何日でもやろうと言い合ったが、一日だけの日光浴ですんでよかったなあ”に尽きた。そしてさらに、気象技術や気象事業にも、このような精魂を傾けることのできる仕事のあったことを痛感したので、また何か計画されたらぜひ参加してやりたいという声の多かったことは、立案者の一人として何よりも嬉しく、学問的成果以上に心のふるえるのを覚えた。

研究調査を業務化していない気象庁の職員も一方では学会員であり、そして数多くの地方官署に勤務する会員諸兄にとっては、勤務制の上からどうしても無理をしてもやらない限り研究調査はできないのが現況である。にもかかわらず実際に若い会員の活躍のみられることは、潜在した意欲の残っていることを物語るものである。気象庁の地方官署では、片方で研究、研修意欲を増進させようと思えば、業務外の仕事をやらせるとか、明け、非番までやらせるとかいった批判をもっともらしく言う人もでてくる。それはそれなりに一理はあるが、研究調査への若い人々の盛上がりをあえてはばむこともあるまいと思う。自分がしたくないのならだまって見ているぐらいの度量が欲しい。楽しいふんい気、やりがいのある職場は、誰にでも喜ばれ期待されるはずである。しかし一方では、日日定められた仕事を大過なく、そして黙々とやっている分には誰からも批判されず、ある意味では過しよいかもしれない。広島では、若い人々が自分から積極的に資料を準備し、明け、非番の日もできて、高層解析の実際の理論的演習をやっているが、それとて向学心にもえた若い気象技術者の意欲の現われに他ならない。気象庁職員なら彼等が自分で立案し自分から進んでやらねばならないことではないぐらいのことは明らかであるが、そこに気象技術者としての誇りを満足させるための若い会員のエネルギーが見られたのだと思う。勉強しようとしている気象庁地方会員が何だか片身

* Y. Neyama 広島地方気象台
—1971年10月4日受理—

の狭い思いをしていることがあるとすれば、学会の立場でどうしたらよいか進言でもしてみたらと思う。学会も長期計画その他で学会員の研究、研修等について考えておられるようであるが、若い会員の力を結集して新しい形で要求されつつある気象学、気象技術の成果の向上に

努めるためにも、学会はその大多数を占める地方会員のためにさらに積極的に取り組んでもらいたいと考える次第である。現在の気象庁では、業務として堂々とは研究を規定できない面があるのかも知れないようなので、

第9回 理工学における同位元素研究発表会

会 期 昭和47年4月13日(木)～15日(土)

会 場 国立教育会館(東京・虎の門)

発表論文

(1) 内容 それぞれの研究分野において、その専門的成果をうるにいたった同位元素および放射線の利用の技術に重点をおいた論文と、同位元素、放射線の利用の基礎となる研究論文とします。なお、得られた専門的成果の報告も差しつかえありません。

研究の内容には、少なくとも一部に未発表の部分が含まれていることを必要とします。

(2) 発表申込み区分 プログラム編成の便宜上、つぎのように申込み区分を設けます。

- ① 放射線照射のための線源および装置に関するもの
- ② 放射線化学その他照射効果に関するもの
- ③ ラジオグラフィに関するもの(装置に関するものを含む)
- ④ オートラジオグラフィに関するもの
- ⑤ 放射線利用計測機器の利用と開発に関するもの
- ⑥ 放射線利用機器に関するもの(エネルギーの利用、発光塗料なども含む)
- ⑦ トレーサーの利用に関するもの(安定同位元素も含む)
- ⑧ 分析に関するもの(安定同位元素も含む)
- ⑨ 製造、分離、精製に関するもの(安定同位元素も含む)
- ⑩ 化合物の合成、標識化に関するもの(安定同位元素も含む)
- ⑪ 放射線測定法および測定器に関するもの
- ⑫ 安全取扱に関するもの(遮蔽、施設、設備、器具、健康管理なども含む)
- ⑬ 廃棄物処理、汚染除去に関するもの
- ⑭ 地球科学、宇宙科学およびラジオエコロジーに関

するもの(安定同位元素も含む)

⑮ その他

(3) 発表時間 1件の発表15分以内の予定

発表者の資格 発表申込者が所属する主催学協会の年会(大会)等の規定または慣例に従う。

発表申込み 所定の申込書(1件1通)によりお申し込み下さい。所定の申込書は下記あて請求して下さい。

113 東京都文京区本駒込二丁目28番45号

日本アイソトープ協会内

理工学における同位元素研究発表会運営委員会

電話 東京(03)946-7111(代表)

発表申込み締切 昭和47年1月31日(月)必着

講演要旨 講演要旨集を発行します。発表申込みがあり次第、所定の原稿用紙(1,400字程度)をお送りします。

講演要旨原稿締切 昭和47年2月29日(火)必着

その他

(1) この研究発表会の運営は、主催学協会より選出された各1名の委員で構成された運営委員会において行ないます。

(2) フルペーパーの報文集は特に発行しません。

なお、日本アイソトープ協会の学術機関誌“RADIOISOTOPES”にはこの研究発表会の発表論文にかぎり、同協会会員外でも投稿することができます。

(3) つぎのいずれかに該当する場合には発表をお断りしますから、ご注意下さい。

i) 講演要旨に記述された内容が本研究発表会の趣旨に合致すると認められない場合。

ii) 発表者の資格が、所属主催学協会の規定または慣例に合致しない場合。

iii) 期日までに講演要旨原稿が提出されなかった場合

共同主催者 日本気象学会他47学協会